

アメリカ生活余話

成相 恭二*

運転免許

ワシントン郊外にある NASA (米国航空宇宙局) に行くことが決ったとき、ナサでいろいろと世話してくれたロバート・C・カメロン博士から、「このあたりの交通はもっぱら自動車で、バス等の便利は悪いから、自動車の運転免許は必要と思われます。」という意味の手紙を受け取りました。私達もそれは予想していましたので、早速妻は自動車学校で習い始めました。私はもちろん運転はできなかったのですが、幼い時に左腕を失ったので、右ハンドルでギアの入替えをしなくてはならない日本の標準的な車では習うことができなかったのです。梅雨から夏にかけて二カ月間、子供のお守りをおばあちゃんに頼みながら、実地と学科合わせて五十時間位の教程を終えて妻が試験にもとおり、免許証を買ったときは、これでアメリカに行っても生きていけると思ってほっとしました。

「オートマチックでパワースティーアリングがついていれば君でも大丈夫だよ。」と友達がいてくれるのを唯一の頼みとして、何のことやら余り良くわからないながらもそういう車を買いましたが、何しろ私はハンドルは一度も持ったことはなし、妻は迷路みたいな教習所からでたのは学校での路上運転で正味一時間程度だけというわけですから、最初の一月位というものは買物、郵便局という度に、同じ頃にナサにいらしゃった天文台の青木さん、名大の杉本さん、宇宙研の川島さんにお世話になりました。実は日本を離れる前には、「折角外国に行くのに同じ場所にこう沢山日本人がいると面白いや」と大言壮語していたのですが、到着後数日間の食事、買物等に前記の人達にお世話して頂かなかつたらどうなっていたことだろうと思われます。謹んで前言は取り消させて頂きます。

ニューヨーク、ボストンは別として、アメリカの他の場所は自動車が生活の必要条件になっているようで、そのせいか運転免許をとる試験も通す方に主眼を置いているように見られます。州により、また受験場所により多少難しさややさしさといった方が適切かも知れませんが一は違うようですが、私のいたメリーランド州では次のようになります。免許を持ってない人は州の自動車局 (Department of Motor Vehicles) から通称 *Learner's Permit* と呼ばれている仮免許証を買います。局に直接

行くか、警察で用紙を買って公証人 (*Notary Public*) の署名を買ってから小切手と一緒に局に郵送すると数日後に送って来ます。この仮免許証があれば免許を持っている人が横に乗っているだけで路上で練習できます。試験は筆記と実地ですが、筆記試験は仮免許証と一緒にくれる数十頁の規則書のうしろにある八十問の中から二十問、実地試験は私の受けたハイアッツビルの警察署では、並列駐車をしたあと一区画ぐるぐると一廻りしておしまいです。筆記試験は巻末に答もでていますから二回位練習すれば及第点は楽にとれますが、杉本さんの研究によると……when safe とか、あと二つ位のきまり文句があってその文句のある文章に丸印をつけるだけで、文章を全部読まなくても大丈夫だそうです。

法律によると友達に横に座って買って自分の車で練習しても良いわけですが、私は全く無経験だったので、自動車学校の先生から教わりました。学校といってもきまった場所で練習するわけではありません。先生がアクセル、ブレーキ、ハンドルが助手席でも操作できる車でアパートの入口まできて、「さあ、始めましょう」というわけです。練習する場所は近くの住宅地の中の車が割り合いに少ない通りや、日曜等にはショッピング・センターの駐車場等と、その行き帰りの道路です。アメリカのように道幅が広くて歩行者が少なく、ラッシュを外せば車通りも少ないところだからこそこういう方法で良いのでしょう。日本の、特に東京みたいなところで同じことをやったらたちまち事故続出で現在の交通ラッシュに輪をかけることは必定です。でもこのアメリカ式だと直線をまっすぐ走る距離が長いので、運転に早く慣れるという点ではすぐれているように思います。考えてみれば自動車というものは 99 パーセント位はほとんどまっすぐ走っているもので、曲がったりバックしたりというのは走りだすときと止まるときを除けば (少なくともアメリカでは) ほとんど必要を感じませんから、私は先生に三十分ずつ六回教った後免許をとりましたが、そのあと高速道路での練習を一回して、計三時間半で一人前に運転できることになりました。

小切手

さて免許証を買って天下晴れて一人で自動車を乗りまわせることになったのですが、実はこの免許証は帰国するまで一回も警官に見せたことはありません。でもこの免許証なるものはいつも持って歩かなくてははいけないことがすぐわかりました。アメリカでは小切手やクレジッ

* 東京天文台

トカード等が非常に普及して、第一、給料からして小切手でくれますから誰でも小切手口座 (*Checking account*) を持っていなければなりません。一週に一度の食料の買物や、デパートの買物の前には銀行によって現金を下ろして行くのが普通ですが、家賃、電話、牛乳等月々払うのは皆小切手を郵送して払いますし、ちょっと大きな買物になると小切手で払うのが普通です。でもこの小切手を払うときに身元証明書として一番先に要求されるのが、運転免許証です。免許証は大人ならほとんど誰でも持って、しかも家に郵送されますから住所不定ではないことがはっきりするからでしょうか。おかげで二年間の滞在中に私の免許証も大分手垢で汚れてしまいました。

買物

ワシントンの商店街は市の中心街ではデパートも五、六階だてで日本とまあ似たような格好をしています。人口がどんどん郊外へ流れだすにつれて郊外にショッピング・センターなるものができて、新しい消費の中心地となっています。このショッピング・センターは通常二階だてのデパートを二軒と衣料、靴、食料品、酒、荒物、菓等々の店数軒ないし数十軒を含み、そのまわりに膨大な駐車場があります。ここに行けば生活に必要なものはほとんど手に入れることができます。私達も毎週一回土曜日にはここにきて食料品を仕入れ、足りない小間々々したものを買って帰るのが常でしたが、私はこの買物が最後まで好きになれませんでした。英語も運転もあまり上手でない妻は一人では行きたがりませんから、自然一緒に行くか、私が一人で行くこととなります。折角土曜日でも休日だというのに午前中をこういう買物でつぶし、帰りには車からアパートまで重い袋を持って三回も四回も往復しなければなりません。「日本にいれば土曜日は半どんだから、お昼からはゆっくりと将棋でも一局指してのんびり過せるのになあ」と何回も思いました。帰る半年位前からは金曜の夕方に買物をすませて土曜の休みを有効に使うようになりましたが、最初の頃は暗くなってからの運転は不安で、夕方の買物なんて考えてもみなかったのです。

青木さんと世間話をしながら買物の仕方について次のように意見が一致したことがありました。つまり、アメリカでは開拓時代以来買物の仕方は本質的には変わらないではないか、というのです。昔は一月に一回ずつ開拓地から町まで二頭立ての馬車を駆って買物にでかけ、夕方になると馬車に一杯品物を買込んで牧場に帰った。今は開拓地の牧場はアパートに、町はショッピング・センターに、馬車は自動車に変わったが、パターンとしては昔も今も同じです。

前述のとおり毎週一度の買物はきらいだったので、西部開拓時代以来、今なお続いているもう一つの買物の方法—カタログによる買物—は愛用しました。シアーズ&ローバックやモンゴメリー・ウォーズ等というデパートは春秋二千頁もあるカタログを発行します。このカタログと巻尺が一本あれば、衣類、家具、レジャー用品いずれでも家にいながら品定めをすませられ、あとは電話で注文して一週間後にデパートのカタログ販売課にとりに行けば良いのです。この方法では特売品等は買えませんが、子供を二人も連れて実際のデパートの中をうろろ歩きまわるより楽なので、夏や冬に備えて沢山衣類を買う時に主に利用しました。このカタログ販売も考えてみれば昔行商人が筏に乗って開拓地から開拓地へとまわって歩き、品物がある場になればカタログから選んで次の巡回の時に持ってきたという方式が少し形を変えただけでこの機械文明の世の中まで続いているのですからアメリカというのもおもしろい国です。

デパートのつけ

日本では百貨店で“つけ”がきくのは相当な金持でしょうが、アメリカという国ではそれこそ猫もしゃくしもつけで買物をしています。デパートの勘定場に行くと、いきなり「現金ですか、つけですか」(Cash or charge?) と聞かれます。誰でも簡単な手続きでデパート等につけ勘定 (*Charge account*) を開くことができ、向うがくれるセルロイドの名刺大の大きさのものをもってれば、現金なしで買物ができるわけです。好きな人になるとこのクレジットカードをデパートで四・五軒、専門店会、石油会社等、計十枚位ケースに入れていつも持ち歩いています。このつけ勘定を持っていると、現金をいつも持ち歩かなくても良い利点がありますが、カードを落したり盗まれたりしてその後他人が使ったとしたら、ある期間内の方は自分が払わなくてはならないという危険性もあります。でもそれよりも恐いのは月賦の利子で、デパート側は通常年一割五分と称していますが、数字のからくりがあって、実は三割という高い利子を払わされることとなります。毎月毎月借金が一銭もないように気をつけて全額払えば良いのですが、「極く少額の利子」等というのを信用して向うのいうだけ払っていると大損するということになります。デパート側から見ればこんなボロ儲けはまたとないわけですから、客が金を払う度に、「Cash or charge?」を繰り返すわけです。このつけ勘定で知らずに損をしているのは特に低所得者層、中でも黒人が多いそうです。現状ではあまりにもひどいというので、州や連邦政府が最近では消費者教育や、法律改正に力を入れていますので、昔よりも買う方が損をする率は少なくなりかけているようです。